

尊い一命を捧げた、本当の意味が

忘れられているのではないか

私達も及ばず乍ら微力を尽くさせて頂きます。……下略

乙飛十六期 故 鶴田 光

母 鶴田 汐（東京）

（この文書は昭和四十二年十二月発行の機関紙「予科練」第2号に掲載された記事です。）

早いもので、皆様方の真心の結晶が

霞ヶ浦湖畔に燦然たる光を放つてより、もう一年半を経過しました。私は、息子が二十二年ぶりに戻って来たような喜びに浸りましたが、今回はまた記念館を建設していただきますとのこと、何と御礼申し上げてよいやら、只々感泣するのみで御座います。

特に今回は記し忝くも高松宮殿下には名誉顧問をご承諾くださること、私達遺族は衷心より感激いたしております。

予科練出身者の大多数の方々は、万死に一生を期すことのできない激しい戦いで散華されたと聞き及んでいます。この世界戦史に例のない壮烈な戦いを、後世に永く伝えるため、この様に立派な企画を次々に実施せられ、私達遺族にとりましては、息子たちが国家民族の繁栄と、皆の幸せを願い、その為に、尊い一命を捧げた本当の意味が忘れられているのではないかと心配していましたが、皆様方のお蔭で救われ、心の底より感謝致しております。